

藤井裕久 民主党元幹事長に聞く

日中関係で対立軸 小沢新体制

結党以来の危機に直面した民主党が小沢一郎新代表の下で再スタートを切った。新進党、自由党など小沢氏の側近として終始行動をともにした民主党元幹事長・藤井裕久氏(前衆議院議員)に新代表の評価や注文などを聞いた。

—— 「ラストチャンス」とされた小沢氏の代表就任への感想は。

「ラストチャンスというよりベストチャンス。最近『若ければ良い』という風潮があった。民主党しかリライブドアしかりだが、次々とマイナスが出た。かつて本人に『あまり前に出ない方がいい』と助言してきたが、いまこそ前が出るのが自然な流れだ。経験に基づく重みある政治家だから、『青い政党』という党のイメージも変えるはずだ」

—— 「壊し屋」の一面に不安も聞かれる

「『壊し屋』『小沢アレルギー』などという批判が本当に当てはまるなら、(政界に)残っていない。戦前に理想に燃えた政治家に犬養毅と尾崎行雄がいるが、彼らはいくつもの党をつくっては壊している。理想を追うと『壊し屋』になる傾向もある。どこでも黒白(こくびやく)をはっきりするから豪腕とも言われる。しかし政治家として当然の資質だ」

—— 自民党旧田中派の小沢氏と福田赳夫氏に師事した小泉純一郎首相の関係から「角福戦争」を引き合いにする見方もある。小泉政治との対立軸は。

「旧田中派は平和主義者の集まりだ。角栄さんは騎兵上等兵で中国に赴き、関東軍の悪行をよく知っている。(大蔵官僚時代に)私が秘書官で仕えた二階堂進さんも、また後藤田正晴さんも同じだ。それに対し、福田さんとは言わないが、小泉さんやその亜流の方々は観念的に『国家』ということを使い過ぎる」

—— 外交、内政面では。

「外交では日中外交だ。小泉さんの任期中に日中関係は修復不可能なほど悪化した。歴代の総理は外交的な配慮をしながらやっている。小沢さんもアジアの平和無くして日本の平和は無いという立場だ。内政では格差社会の問題もある。株価はバブル最盛期より良いという話がある一方、青森県や富山県の地方では失業率が上がっている。これだけの格差は放置できない。小泉さんはぶっ壊した後の社会の将来像が無い。小沢氏はしっかりとした将来像を持っているから、無理に対立軸をつくらなくても自然と違いが際立つ」